戦時下東京音楽学校の記録と記憶のアーカイブ化に向けた試み
――「学徒出陣」の調査と戦没学生の作品演奏を事例として――

橋　本　久美子

はじめに

東京藝術大学音楽学部の前身である東京音楽学校において、全国の高等教育機関同様、戦時下に徴兵年齢に達した学生を召集する、いわゆる「学徒出陣」が行われたことは知られている。当時の公文書や卒業生への戦時経験インタビューや寄稿は『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇第二巻』に収載されているが、記録は断片的で当時の状況を網羅するには至らず、インタビューや寄稿も個人の経験と記憶が中心となるため、学校史の解明には不充分である。そもそも当時の同校に男子生徒[1]が何人在籍し、昭和18年12月に一斉入営した「出陣学徒」は何人いたのか。その後終戦まで召集された学生はどれほどいたのかといった基本的な情報すら把握されてこなかった。したがって何人が戦死・戦病死・戦傷死したか等はさらに不明である。未解明の理由もいくつか推察されよう。在学生の出征については学校側も把握していたに違いないが、卒業後の出征、復員、戦死については家族や友人の間では共有されても、学校には情報が届かなかった可能性もあろう。また戦後の音楽学校は陣容を刷新して学制改革を急ぎ、時代は経済復興を最優先し、「学徒出陣」の実態解明は置き去りにされたのだろう。やがて「還らなかった学生」を知る学友も減り、大学が遺族と連絡を取ることも困難になった。しかしながら唯一の官立音楽学校である東京音楽学校史の学徒出陣の解明は、戦時下と戦後の音楽教育、ひいては音楽界を捉えるためにも不可欠であると考えられる。

戦後70年にあたる平成27年、筆者は新聞社・放送局・遺族からの依頼により戦没学生２名の在籍等について行った資料調査を契機に、東京音楽学校における在学中召集の実態把握が必要であることを認識した。相前後して全国の大学でも戦後50年頃から大学アーカイブズが中心となって調査が行われていることを知り[2]、学内の準備調査を経て、昨年より体系的な調査を開始した[3]。

以下、昭和16年12月の対米英開戦から昭和20年８月敗戦までの戦時下を対象期間として、東京音楽学校の「予科」「本科」「甲種師範科」「邦楽科」「研究科」「聴講生」の記録調査について調査方法、資料保存の現状とあわせて経過報告を行う。当時の「研究科」は同校本科卒業生のみが入学するため、予科で調査した氏名の一部がそこに所属する。「聴講生」とは研究科修了生が引き続き在籍したもので、人数は少数である。今回は調査対象としない「選科」

についてもふれておく。選科の設置は明治22年と古く、入学資格は子供から社会人まで広く、希望する専攻実技を最長５年、学ぶことができた。昭和に入ると入学者数は同校の本科・師範科の数倍に上るが、授業料滞納、家事都合、転勤等の理由で退学する者も多く、修了に至るのは入学生の三分の一程度であった。在学期間が１年未満の場合、年に一度作成される生徒名簿に一度も記載されない可能性がある。しかし大学史史料室に寄せられる東京音楽学校の学生に関する調査依頼のなかには選科生も多く、なかには依頼者側では本科か師範科の卒業生と認識されていても実際には選科生であることも珍しくない。調査研究の利便と効率化のため、選科生名簿の作成も行っている。選科生には入学順に通し番号が付され、明治36年９月入学の959番から昭和23年４月入学の14478番まで、13520名が記録される。島崎藤村もその一人である[4]。

大学側の記録と卒業者の記憶を併せ、戦時中に書かれた知られざる作品、とくに戦没学生の作品が集収されれば演奏し、楽譜や諸資料とともにデジタルデータを保存し、広範な活用に供し継承することが重要であろう。そこに必要なのは資料収集・保存・活用を繰り返しながら構築していく循環型アーカイブである。このことを大学創立130周年記念演奏会「戦没学生のメッセージ」を事例として考察したい。

１　在学中召集の調査報告

１－１　在学中召集の調査対象となる学生に関する記録

本調査に使用する基本的な資料について記す。出陣学徒の調査を行った他大学では、「応召記録」などが存在する例もあるが、通常は学籍簿が基礎資料とされている。学籍簿は学生の入学から卒業まで、在籍に関する基本状況を記し、通常は永年保存される。東京藝術大学の『百年史』(1987～2003年刊行)編集において、学生については、演奏会の出演、学友会誌への寄稿、演奏旅行記の執筆者等から個人名が掲載され、名簿を参照することはあっても在籍調査を行う必要は生じなかった。学籍簿を調査することもなかった。ところが近年、東京音楽学校時代の公文書類が音楽学部大学史史料室に移されたことで、『百年史』編集時に見たことのない文書類が大量に存在することを確認した。それらの簡易リストが、平成29年７月より同室ホームページに掲載され検索可能となった。在学中召集の調査は、このような大学史史料の保存と整理が背景にあって可能になり、他方、本調査が記録整理と公開の促進にも繋がるという結果につながっている。

現存する予科、本科、師範科の「学籍簿」を年代でまとめると【表１】のようになる。これは各部署の協力を得て調査した結果であり、今後、表中の(1)(3)が見つかる可能性は低いと考えている。

【表１】東京音楽学校の「学籍簿」の有無

	入学年	学籍簿の有無（内訳：科別）
(1)	明治20年度～31年度	未確認
(2)	明治32年度～大正13年度	有　（予科、本科、甲種師範科、乙種師範科）
(3)	大正14年度以降	未確認

一方、選科の学籍は明治36年より東京音楽学校の最終年度となる昭和23年入学まで確認される。選科の教育は分教場で行われたので、タイトルに「分教場」を含む文書も選科資料と判断される[5]。学籍関係の資料は、選科の分を含め、【表２】の簿冊11点が確認されている。

【表２】現存する選科の学籍簿

	文書タイトル（原表記）	含まれる年度、科（内容から補記）
1	「本科　豫科　学籍簿」	明治32年入学から大正13年入学生
2	「甲種師範科学籍簿」	明治32年入学から大正13年入学生
3	「乙種師範科学籍簿」	明治32年入学から大正13年入学生
4	「明治三十三年九月以降　生徒学籍簿」	明治33年から明治36年入学生、甲種師範科、乙種師範科、本科、予科
5	「研究科学籍簿」	明治34年入学から大正13年入学生
6	「聴講科学籍簿」	明治42年入学から大正11年入学生
7	「明治三十六年九月 選科学籍簿 自第九五九号 至第四六一八号」	明治36年入学から大正９年入学生
8	「大正九年四月以降 選科学籍簿 自第四六一九号 至第六三〇〇号」	大正９年入学から大正14年入学生
9	「大正十四年九月 学籍簿 分教場 六三〇一～八五七八」	大正14年入学から昭和９年入学生
10	「昭和九年四月 学籍簿 分教場 八五七九ヨリ」	昭和９年入学から昭和14年入学生
11	「昭和十四年四月 学籍簿 東京音楽学校分教場 一〇七二〇～一四四七八」	昭和14年入学から昭和23年入学生

上掲の通り、戦時下の予科・本科・師範科関係の学籍簿が欠落しているため、本調査では、それを補足する資料として、学生の入退学、入営情報、本籍地や在学時の住所、個人レッスンやクラス授業の担当教員などが記された周辺資料を用いた。また入学書類は、明治・大正期は保存されていないが、幸い昭和10年代のものはほぼ揃う。ここから入学生全員の氏名を入力する。入学書類には入学前に師事した実技教員の氏名、前歴校である出身中学校、師範学校、私立音楽学校の名称などが記され、追跡調査やライフヒストリーを追う際に役立つ。同窓会名簿は卒業生の会員の名簿であるため、入学生全員の把握には入学時の情報が必須である。成績関係書類は学年の半ばと末に行われる試験成績を記すが、受験しなかった場合、「入営」「病気」「退学」等の理由が記載される。そこに「入営」と記されていれば、試験の時点で入営していたと分かる。さらに退学・復学・除籍の記録の簿冊もあり、病死等の事情も記載される。記載内容の信頼性は高いが、全てを網羅しているとは限らない。連絡がなければ記載されない等の事情もあろう。入学書類によって入学者名簿の作成は可能だが、在学中召集についての追記などはない。いずれも断片的だが、参考情報の集積と照合から少しずつ正確な情報に近付いてゆく。

調査結果は、全入学者名を基本に、他の資料と併せ、下記15項目からなる一覧表に作成している。①典拠資料、②入学年度、③学科、④氏名(入学書類の表記を転記)、⑤氏名別表記（異体字、略字等)、⑥フリガナ(原資料通り旧カナ)、⑦フリガナ現代表記(検索用に併記)、⑧生年月日（和暦)、⑨生年の西暦、⑩本籍地、⑪学校歴、⑫兵役（入営経験のある学生もおり、ナシ、適齢前、免除等の記載がある)、⑬卒業年度(同期入学でも卒業時期は違う場合がある)、⑭同声会名簿(最新の同窓会名簿より、御存命、没年月日、記載無しなどの情報を入力。没年が戦後であれば戦没学生の調査対象から外す)、⑮備考（氏名の漢字に関すること、改姓情報、文書記録では未確認でも卒業生等から戦没情報があれば記載)

１－２　調査に使用した資料

調査に使用した資料のタイトルが【表３】である。１～12は予科と本科の入学関係、13～21は邦楽科関係、22は研究科入退学、23～35は甲種師範科、36～45はその他該当年代の学生情報に関する公文書である。46の同窓会名簿からは存命あるいは没年月日の情報などを得た。

【表３】調査に使用した資料一覧

	文書タイトル（原表記、但：新字使用）
1	昭和十一年度 予科入学願書 東京音楽学校
2	昭和十二年度 予科入学願書 東京音楽学校
3	昭和十三年度 予科入学願書 東京音楽学校
4	自昭和十三年度 予科入退学許可簿 教務課
5	自昭和十三年度～二十一年度 本科入退学許可簿　教務課
6	昭和十四年度 予科入学願書 東京音楽学校
7	昭和十年四月以降 生徒入退学通知簿　教務課
8	昭和十五年度 予科入学願書 東京音楽学校
9	昭和十六年度 予科入学願書 東京音楽学校
10	昭和十三年度以降 入退学願書 研究科
11	昭和十九年度 予科入学願書 東京音楽学校
12	昭和二十年度 本科入学願書 東京音楽学校
13	昭和十一年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
14	昭和十二年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
15	昭和十三年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
16	昭和十四年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
17	昭和十五年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
18	昭和十七年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
19	自昭和十三年度 邦楽科入退学許可簿 教務課
20	昭和十八年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
21	昭和十九年度 邦楽科入学願書 東京音楽学校
22	自昭和十三年四月至昭和十七年三月 研究科入学退学願綴　教務課
23	昭和十一年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
24	昭和十一年度至［十二年度］甲師入退学通知簿 教務課
25	昭和十二年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
26	自昭和十三年［21年迄］甲師入退学許可簿 教務課
27	昭和十三年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
28	昭和十四年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
29	昭和十五年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
30	昭和十六年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
31	昭和十七年度 Ａ甲種師範科入学願書 東京音楽学校
32	昭和十七年度 Ｂ甲種師範科入学願書 東京音楽学校
33	昭和十八年度 甲種師範科入学願書 東京音楽学校
34	昭和十九年度甲種師範科入学願書
35	昭和二十年度 師範科入学願書 東京音楽学校
36	昭和二十二年（研究科）入退学許可簿 教務課
37	昭和二十二年三月（二ノ一）卒業学年 試業成績 東京音楽学校
38	昭和十九年三月［成績］
39	昭和十参年ヨリ昭和十七年 聴講生入退学綴
40	聴講生（入退学願書）昭和十八年四月以降 二十三年十二月
41	自昭和十三年度以降 講生入退学許可簿 教務課
42	昭和十八年 業証書登録簿 東京音楽学校
43	昭和二十二年（本科）入退学簿 教務課
44	旧制専門学校（昭和五年以降）学業成績原簿［昭和19年まで］
45	第七号本科修了生登録簿
46	東京藝術大学音楽学部同声会『同声会会員名簿』平成25年６月発行

入営情報を補い確認する参考資料として、【表４】の時間割表が挙げられる。教員ごとの担当時間表では、教員Ａのピアノ実技の時間表の場合、金曜日の３時間目に学生Ｂの氏名が記されていれば、学生Ｂはピアノを教員Ａに師事していたことを示す。その氏名が昭和18年10月以降の時間表では赤鉛筆で消されていると召集された可能性が高く、他の資料と照合し確認していく。時間割表は学生Ｂがどのような実技を履修したかを知る手掛かりにもなる。戦時下の時間割が残されているのは本調査には幸いであった。時間割表は、保存する意識はなかったかもしれないと推測されるような保存状態で、表紙もタイトルも無いものもある。その場合、記された生徒氏名より年度を調査し特定し、［　］内に補記した。

【表４】入営情報を補足する時間割表

	時間割表タイトル。［ ］内は補記
1	［予科生徒時間割　昭和13年度］
2	「昭和十三年　時間割　昭和十四年　授業時間表　教務課」
3	「16年度」［授業時間割表］
4	［時間表］「昭和十七年十月ヨリ変更　教務課」
5	「昭和十七年四月　時間表　台本　教務課」
6	「時間表　自昭和十八年十月　至昭和十九年三月　永久保存」
7	［昭和18年（記載される氏名からの推定年度）授業時間割素案］
8	「昭和二十年度　授業時間割表」

現在までに男子学生の在籍等基本情報の入力をおおかた終え、周辺資料にて補足を継続しながら、女子学生についても入学者氏名一覧の作成を開始している。在学中召集と戦死・戦傷死・戦病死に限れば男子学生のみで良いが、東京音楽学校の戦時下の教育や演奏活動などを解明するには、専攻別と男女別に把握できることも必要であろう。研究科の学生は、昭和18年12月の一斉入営以前にも入営の記録が散見されるが、12月の一斉入営には含まれず、その後また昭和19年３月までに相当数が入営したことがわかる。

１－３　入営者数、戦没者数の集計

戦時下に在籍した男子学生（予科、本科、師範科、邦楽科、研究科）の在籍数と入営記録等をまとめたものが次頁【表５】である。若干の説明を付す。

昭和16年当時、同校には予科１年と本科３年の四年制のコースと、甲種師範科の三年制のコースがあった。前者は演奏家や作曲家の養成、後者は学校教員の養成を行った。邦楽科も三年制であった。

昭和16年10月16日、勅令により「大学学部ノ在学年限又ハ大学予科、高等学校高等科、専門学校〔もしくは〕若ハ実業専門学校ノ修業年限ハ当分ノ内夫々六月以内之ヲ短縮スルコトヲ得」と定められ、東京音楽学校でも、従来昭和17年３月に卒業すべき学生が昭和16年12月に卒業し、学生に認められていた徴集延期がなくなり召集されるようになった。本調査においては、本来学生であるはずの期間に卒業し召集されることも在学中召集とみなす。すなわち四年制コース（予科１年＋本科３年）は昭和13年入学から、三年制コース（甲種師範科および邦楽

【表５】男子在籍者数、入営者数の統計

括弧〔 〕内の数字は、学内公文書に記載はなく、同級生等からの情報により判明した人数である。

入学年度	科	在籍者数	入営者数 (研究科以前)	研究科/聴講生 在学中の入営	戦没者数	戸山学校	注１
昭和10年以前				4			注２
昭和11年	予科	14	0	3			
	甲種師範科	17	0	0			
	邦楽科	5	0	1			
昭和12年	予科	12	0	4			
	甲種師範科	12	0	0			
	邦楽科	4	0	0			
昭和13年	予科	16	0	5	〔1〕		注３
	甲種師範科	25	1	1			
	邦楽科	10	0	0			
昭和14年	予科	17	0	7			
	甲種師範科	23	0	0			
	邦楽科	6	0	0			
昭和15年	予科	25	1	8〔2〕	〔2〕		注４
	甲種師範科	26	0	0			
	邦楽科	3	1	0			
昭和16年	予科	21	7	0	1〔1〕	1	
	甲種師範科	26	2	0			
	邦楽科	1	0	0			
昭和17年	予科	25	9〔2〕	0	1〔1〕	7	
	甲種師範科Ａ	21	2	0			
	甲種師範科Ｂ	12	8	0			
	邦楽科	4	1	0			
昭和18年	予科	22	5	0		4	
	甲種師範科	23	14	0	2	2	
	邦楽科	7	2	0			
昭和19年	予科	23	7	0	1		
	甲種師範科	11	4	0			
	邦楽科	8	1	0			
昭和20年	本科	21	0	0			
	師範科	4	1	0			
	本科邦楽科	7	1	0			
	合計	352*	69**	35***	10	14	注５

注１．昭和13年入学以降の予科、昭和14年入学以降の甲種師範科および邦楽科352名中の在学中召集は、昭和13年入学の師範科１名を引いて68名となり、当該期間中に研究科を含めて召集された学生全体は、記録および他情報から確定できた範囲で104名となる。その後研究科に進み、さらに聴講生として在籍した者も昭和16年12月以降に召集されるため、それ以前入学の欄も設けた。研究科全体の入学者数は記入せず、研究科からの入営者数のみ記した。なお、研究科へは本科卒業生のみが進学したので、学生氏名は予科入学時のものを入力しておけば良いことになる。

注２．昭和11年以降は科ごとの入学人数を記載し、それ以前については人数のみとした。

注３．公文書等の記載で確認されず、同級生の証言から戦没と断定できたものは〔 〕で人数を記した。括弧の無い数字と括弧付の数字を足した数字が戦没者数となる。

注４．戦没学生２名は在学中召集であることが確実なため、入営者数と戦没者数に〔２〕を記す。

注５．* 在学者数352名は、昭和13年以降予科入学、昭和14年入学以降の甲種師範科と邦楽科である。

** 入営者数（研究科以前）の合計69名は、前述「*」にかかわらず、戦時下の在学中召集と判明した人数であり、昭和13年入学の甲種師範科１名を含んでいる。

***「**」と同様、研究科／聴講生在学中の入営も、記録上確認できた人数と証言等から確定した人数〔　〕の双方を記す。

科）は昭和14年入学からが該当する。昭和20年には規則改正により予科が廃止され、本科四年制となる。

表中、昭和12年入学以前（甲種師範科と邦楽科は昭和13年以前）に網掛けされている。基本的には調査対象外としたが、昭和12年入学でも留年や休学により在学年数が通常より長引き、研究科進学後に在学中召集されたケースを示すため、欄を設け、入隊者数を記し、合計人数にも反映した。

入営記録については、例えば同時期に休学する学生が複数いても、ある者には「休学（兵役)」、ある者には「休学」と記される。「休学」で入営の可能性はあるが、確認できた場合を除き人数に含めない。

戦没者数の確定はきわめて難題である。表中、公文書類で５名が確認され、別に５名が同級生の証言等から情報を得て確認された。入営情報が確認されずに戦没だけが確認された例もある。

１－４　出陣学徒仮卒業式（昭和18年11月15日）に出席した学生

「昭和十八、十九年度卒業式一件書類　東京音楽学校」[6]は、同校が最高学年の仮卒業式を行うための式次第、学生名簿、父兄への案内など整えていたことを示している。学校側が仮卒業させることができたのは、修業年限の半分以上を従事している学生であった。学生本人の出征中に、実家に卒業証書が送られてきたという。しかし、下級生で召集される学生も、先輩と一緒に仮卒業式に出席した。学校側としては、彼らは休学であり、復学させるべき学生だが、仮卒業式を執り行って送り出したのであろう。

昭和18年の最初の学徒出陣の人数を知る手掛かりとなる一枚の写真がある。『東京芸術大学百年史　東京音楽学校篇第二巻』も掲載される、11月15日の仮卒業式の集合写真である。前列に校長と教師が椅子に掛け、後に学生が立っている。最高学年の仮卒業生は20名だが、その倍以上の学生が並んでいる。しかしここに「入営のため休学」の27名を加え、47名であれば、ほぼ辻褄が合う。

【表６】は、昭和18年12月１日入営と直後の入営をまとめたものである。仮卒業集合写真の情報として清野から新島までの氏名が判明していた。これを『昭和十八年仮卒業証書登録簿』『昭和十八、十九年度卒業式一件書類　東京音楽学校』『自昭和十三年度本科入退学許可簿 教務課』と照合すると、写っているのは①昭和18年11月15日仮卒業者20名（氏名に網掛けしている）と②同年12月１日入営のための休学者27名で、③その後18年12月と19年２月に仮卒業した山本と橋本の２名は写っていないと推測される。

下表49名中、師範科26名（うち15名が１年生)、本科と予科23名の専攻別では、声楽７名、オルガン１名、弦楽器３名、管楽器８名、作曲２名、そして邦楽科２名であった。

【表６】出陣学徒仮卒業式（昭和18年11月15日）に出席した学生

	氏名	入学年度と所属	専攻	入営・休学・仮卒業等の記載情報
1	清野澄夫	昭和18年師範科		昭和18年12月1日入営のため休学
2	廣田幸夫	昭和16年本科	チェロ	仮卒業：昭和18年11月15日
3	鈴木清三	昭和16年本科	オーボエ	仮卒業：昭和18年11月15日
4	大橋幸夫	昭和15年本科	クラリネット	仮卒業：昭和18年11月15日
5	萩谷納	昭和16年本科	声楽	仮卒業：昭和18年11月15日
6	山内幸男	昭和16年本科	オーボエ	仮卒業：昭和18年11月15日
7	増広卓三	昭和17年師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
8	小田野正之	昭和17年予科	声楽	昭和18年12月１日入営のため休学
9	岩井直溥	昭和17年予科	ホルン	昭和18年12月１日入営のため休学
10	野間太郎（義弘）	昭和16年本科	ヴァイオリン	昭和18年12月１日入営のため休学
11	大石清	昭和17年予科	テューバ	昭和18年12月１日入営のため休学
11	鬼頭恭一	昭和17年予科	作曲	昭和18年12月１日入営のため休学
13	新島弘	昭和18年予科	ファゴット	昭和18.12.1入営
14	國枝　誠也	昭和16年予科	声楽	仮卒業：昭和18年11月15日
15	平田　愼一	昭和16年予科	声楽	仮卒業：昭和18年11月15日
16	伊藤　信夫	昭和16年予科	オルガン	仮卒業：昭和18年11月15日
17	三瓶　十郎	昭和16年予科	ヴァイオリン	仮卒業：昭和18年11月15日
18	山本　錫太郎	昭和16年予科	トランペット	仮卒業：昭和18年12月15日（第２学年）
19	朝一　庸	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
20	菅村　央	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
21	時澤　鐵太郎	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
22	平田　勝	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
23	布施　和郎	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
24	前原　忠夫	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
25	三井　健	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
26	安永　武一郎	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
27	横谷　英次	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和18年11月15日
28	橋本　喬雄	昭和17年Ａ甲種師範科		仮卒業：昭和19年２月10日
29	杵家　安廣	昭和17年邦楽科	長唄（三味線）	仮卒業：昭和18年11月15日
30	伴　直信	昭和17年予科	声楽	昭和18年12月１日入営のため休学
31	戸田　士雄	昭和17年予科	トロンボーン	昭和18年12月１日入営のため休学
32	村野　弘二	昭和17年予科	作曲	昭和18年12月１日入営のため休学
33	淺香　淳	昭和18年予科	声楽	昭和18年12月１日入営のため休学
34	宮本　英男	昭和18年予科	声楽	昭和18年12月１日入営のため休学
35	早川　良一	昭和18年予科	箏曲（山田流）	昭和18年12月１日入営のため休学
36	飯島　一夫	昭和17年Ｂ甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
37	川島　正二	昭和17年Ｂ甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
38	佐藤　一夫	昭和17年Ｂ甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
39	篠原　正敏	昭和17年Ｂ甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
40	渡邊　今朝藏	昭和17年Ｂ甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
41	伊澤　敬介	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
42	今井　弘	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
43	葛西　滿郎	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
44	川原　浩	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
45	木村　信之	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
46	駒ヶ嶺　大三	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
47	前澤　繁藏	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
48	松平　立行	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学
49	柳　力	昭和18年甲種師範科		昭和18年12月１日入営のため休学

2　演奏会の状況から見える戦時下の東京音楽学校

在学生の入営は、学校の演奏会にどのような影響を与えたのだろうか。『東京芸術大学百年史　演奏会第二巻』で昭和初期から戦後までの学校主催の演奏会の記録を通覧すると、昭和６年に着任したK.プリングスハイム（1883～1972）の時代、従来は年２回であった定期演奏会が４回に増え、A. ブルックナー（1824～1896）、G. マーラー（1860～1911）等の大規模な管弦楽曲を盛んに取り上げたが、低弦楽器や管楽器のパートを支えたのは海軍軍楽隊であった。昭和13年６月の定期演奏会からナチス推薦のH. フェルマー（1908～1977）が指揮者となる。対米英開戦後の演奏会には二度、大きな変化を見て取ることができる。一つ目は開戦直後の昭和16年12月21日の第95回定期演奏会で、海軍が参加しなかった。曲目はすべてブラームスの作品で構成され、ピアノ独奏（管絃楽附）第一協奏曲・ニ短調・作品15。独奏は水谷達夫。休憩後、第一交響曲・ハ短調・作品68が、フェルマー指揮により演奏された。この時、本科作曲部３年生でフルートを担当した土淵るり子は、「開戦後は海軍も多忙で、音楽学校のメンバーだけで演奏することになり心細かった。だから演奏を終えた時、自分たちだけでできたと互いに喜び、涙ぐんだ」と回想する（平成27年７月談）。演奏会評は「管絃楽は原曲にも欠点はあらうが、しかし其れにしても乱れすぎていた様に思ふ」（音楽文化新聞、第１号、昭和16年12月、９頁）であった。二つ目は、「学徒出陣」により管楽器専攻生８名を送り出した直後の昭和18年12月に行われ、「軍用機献納披露」と冠した第101回定期演奏会である。「君が代奉唱」、「海行かば」、海軍省制定「海軍航空の歌」、西条八十作詞・橋本國彦作曲「学徒進軍の歌」、「愛国行進曲」と続いた後で、モーツァルトの作品２曲《コジ・ファン・トゥッテ》序曲と《シンフォニー・コンチェルタンテ》、ベルリオーズ《幻想交響曲》が演奏された。これが戦時中最後の定期演奏会となった。昭和18年度中には研究科の学生も次々に召集された。残された学生たちも次は自分だろうかと落ち着かない日々だったことであろう。やがて適齢前の男子学生も女子学生も勤労動員され、管絃楽どころではなくなる。昭和19年には報国団演奏会が３回あったが、昭和20年には依頼に応じての慰問演奏等に限られる。昭和18年に甲種師範科入学し翌19年12月に陸軍戸山学校に入学した沼田元一が、休みをもらって母校を訪ね、静まり返った音楽学校に衝撃を受けたのは東京大空襲の後だろうか[7]。

3　戦時下東京音楽学校予科・甲種師範科・邦楽科の男女生徒

男女生徒の人数を【表７】に示す。三つの科に分けたが、本科の専攻別の男女比の一例をあげると、ピアノ専攻生は圧倒的に女子が多く、昭和13年度入学では、男子３名、女子22名、昭和14年では男子２名、女子22名である。管楽器はほぼ男子が独占、作曲も男子優勢である。邦楽科では箏曲の男女差が大きく、例えば男子１名に対し、女子６名などである。甲種師範

科は男女の人数差が少ないが、昭和19年に男子が半減し、昭和20年は、男子４名、女子59名となり、男子の激減を女子が埋めた様子が窺われる。

【表７】戦時下の男女生徒数

入学年度	予科＊			甲種師範科			邦楽科		
	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
昭和13年	16(＋1)＊	34(＋1)＊＊	50(＋2)	25	25	50	2	16	18
昭和14年	16(＋1)＊	37(＋1)＊＊	53(＋2)	24	28	52	7	12	19
昭和15年	22	30	52	25	30	55	3	14	37
昭和16年	21	38	59	26	29	55	1	19	20
昭和17年	25	35	60	21＋12	21＋26	80	4	27	31
昭和18年	22	50	72	25	36	61	7	29	36
昭和19年	22	33	55	11	32	43	9	12	21
昭和20年	20	44	64	4	59	63	6or7	13	19or20

注記：予科　＊ 昭和20年度には予科が廃止され、初めから本科入学となる。
昭和13年度　＊／＊＊ 前年度からの継続者１名
昭和14年度　＊／＊＊ 前年度からの継続者１名
昭和16年度　甲種師範科・邦楽科は入学願書・受付簿より。
昭和17年度　甲種師範科は従来の３年制に加えて、４年制（B）も募集
昭和18年度　予科：うち２名は特別
昭和19年度　このほかに邦楽科特別２名；溥一彬、王克智
昭和20年度　邦楽三味線の合格者一名入学したか否か不明（受付簿に記載あるも入学願書なし。通常、入学願書は入学者のものだけが残されている）

4　戦時下の東京音楽学校をどう伝えていくか

東京音楽学校生は現在の音楽学部と同様、受験の時点で専門の実技を習得しており、卒業後も作曲や演奏等、個人の名前で活動した人が多い。それゆえ出陣学徒や戦没学生についても、人数だけではなく、一人一人に目を向けることが重要なのだが、そうした調査と検証が看過されてきたのはなぜだろうか。

昭和24年に東京音楽学校と東京美術学校を統合され、新制大学・東京藝術大学が誕生したのは、全国の新制大学同様、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）による学制改革の一環である。昭和３年から東京音楽学校長の任にあった乗杉嘉壽（明治11年［1878］～昭和22年［1947］）が昭和20年10月に辞職し、田中耕太郎（明治23年［1890］～昭和49年［1974］）校長代理を経て、昭和21年東北帝国大学教授小宮豐隆（明治17年［1884］～昭和41年［1966］）が東京音楽学校長に着任する。教育刷新委員・国語審議会委員をつとめた小宮は音楽学校の教員にも学校改革に関する意見を求め、音楽学校の刷新に着手する[8]。戦時下に学校で重要な役割を果たした教員――例えば声楽の木下保、ピアノの井口基成、作曲の橋本國彦の各教授――を去らせた。教員間には国策に積極的に協力した人物を互いに批判し、戦前・戦中を封

印する空気が醸成される。上掲３教授は、国威発揚する演奏会を指揮し、学徒動員を引率し、満州建国を祝う曲を作曲した。教育の刷新は戦時色払拭のみならず、音楽学校が明治以来ドイツ系中心であったところへフランス系を採用するなどの転換にも表れた。専門学校から大学に改組するにあたり音楽学部には楽理科が、美術学部には芸術学科が置かれ、その一方で昭和18年（1943）に本科に昇格した邦楽科は、新任校長の方針と洋楽系教員の反発等によりいったんは廃止の方針に決し、結果的に一年遅れて設置された。

新制大学で戦時下の封印を解くことをタブー視する傾向は長く続き、未解明のことが多く残された。今後、大学側と学生側の双方からの解明を行うことが新たな視点構築の基礎になると考えられる。東京音楽学校を事例として解明を進めることで、私立音楽大学や、全国の音楽大学等とも連携し、戦時下の音楽界を解明することにつながるのではなかろうか。

5　「戦没学生のメッセージ」を新聞、テレビは何をどう取り上げたか

平成29年（2017）７月30日、大学の創立130周年記念プログラムの一つとして、シンポジウム「戦時下の東京音楽学校・東京美術学校～アーカイブ構築に向けて」および演奏会「トークイン・コンサート　戦没学生のメッセージ」が開催された。昭和15年入学の葛原守、草川宏、昭和17年入学の鬼頭恭一、村野弘二の四名の作品を取り上げ、企画は演奏藝術センター・大石泰教授を代表者として楽理科と大学史史料室の連携で進められた。詳細は省くが、「戦没学生のメッセージ」というタイトルのインパクトと企画の珍しさも手伝ってか、マスコミの関心をひいた。実際、東京藝術大学が戦没学生の作品演奏を正式な演奏会として行うことは初めてで、経費調達にクラウドファンディングを開始した４月上旬より、各紙誌・各局からの問合せや撮影が10月現在まで続く。同じ曲を演奏したいとの希望も演奏者個人や団体から寄せられている[9]。ここから見えた課題にもふれたい。

筆者が把握する９月28日までの新聞、雑誌掲載と放送を後掲の【表８】にまとめた。

テレビはTBSが８月１日のNEWS23で７分20秒程度、NHKが８月15日と17日に関東甲信越の番組にて、ともに５分と７分程度であった。大石のNHKラジオ第一放送への出演もあった。新聞雑誌記事は14件で、そのうち事前掲載７件、事後掲載８件である。

大石がアナウンサーと対談したラジオ番組を別にすれば、テレビは２局とも草川宏に焦点を当てた。TBSは番組冒頭の数秒間で４名の顔写真を順に映し、草川宏のピアノソナタを中心にご遺族や演奏者を取材しドキュメンタリーに仕立てた。NHKも角度は異なるが草川宏の歌曲《浦島》を掘り下げ、作品と人生を描いた。テレビ番組は一度見ただけでストーリーが理解されるよう情報を絞り込む。言い換えれば大量の周辺情報をそぎ落し、編集チームの共同制作による一種の作品に仕上げる。新聞も草川宏の遺族の取材に注力したが、放送に比べれば、４名の名前や略歴程度は一通り記載したものが多い。福山市の地方版が葛原守、福

岡市の地方版が鬼頭恭一、というように地域に結びつく人物に焦点を当てるものもあった。

草川宏にマスコミの関心が集中した理由は、鬼頭と村野は一昨年すでに報道されたこと、葛原はピアノ専攻で対応する甥は本人を直接知らないのに対し、草川は今回初めてクローズアップされる作曲専攻生で、弟の誠氏の記憶が鮮明で取材に快く応じたことなどが考えられる。ただ、注目すべきは、記者もディレクターも、肝心の音楽については演奏者や我々企画側から聞き出した言葉をそのまま使う傾向にあり、曲の傾向や評価も、取材に応じた演奏者の感想に依存する結果となった。草川宏が注目されたのは彼の人生だけが悲惨だったからではない。彼の作品だけが際立っていたからでもない。そもそも草川宏は、作品の概要や特徴について把握されない段階でターゲットに定められ、演奏会当日はそのようなストーリーを前提に収録されたのである。父・草川信が知られた作曲家であることで人物を紹介しやすく、また作品数が多いので今後の演奏への期待もこめられていた等もそれを後押ししたと考えられる。

マスコミが「初めて」に惹かれるのは、いわば性（さが）であり、人々はマスコミが関心を寄せたものに注目する。マスコミは草川作品を他より高く評価したのではないが、クローズアップすること自体が価値評価したような印象を与え、逆に紹介しなければ人々の記憶にすら留まらない。専門家が語る内容以上に、マスコミが取り上げること自体が意味を持つ場合もある。大学側は戦没学生の作品演奏の曲目、演奏順、それぞれの演奏者などを慎重に設定した[10]。演奏会終了後、4人の作曲者のご遺族は一様に感激し、満足されていた。だがテレビ2局が同じ一人の学生にカメラを向けた結果、感激が深まる家族と、些か落胆する家族とがあった。マスコミに取り上げられたことは、プロジェクトにとってのみならず、この種のテーマが世間に知られることにおいて有益だが、情報を提供する側が、対マスコミにおいて、知らず知らずのうちに一人に注目を集める情報を提供したのではないかと思い返してみる。プロジェクト実行者が誰か一人を贔屓するはずもないが、草川が報道上の「新人」で、父が作曲家で、作品数も多いと知らせるだけで、マスコミの視点を誘導した可能性はある。そのニュース性が言葉と映像とで増幅されることで、番組が社会貢献とともに罪作りにもなりかねないのと同様、情報提供側もその片棒を担ぎかねないと肝に銘じたい。数分の「作品」であるテレビの番組特集は、その枠組みで取り上げられた内容に誤りがなければ適正であろうが、「戦没学生のメッセージ」の意図と内容において適正であるとは限らない。戦没学生の情報収集には社会との連携が必要なだけに、対マスコミの勘所を鍛えたい。

「戦没学生のメッセージ」はいかなるメッセージとなり得ただろうか。曲を魅力的に演出することも、企画者の意図を介在させることを意味するだろうか。学生時代の作品ゆえの難しさを認識した上で、メッセージを伝える演奏会とアーカイブズ構築を継続することこそ良策と考えるべきであろう。

【表８】平成29年６月22日から９月28日までの新聞、雑誌掲載と放送一覧

新聞・雑誌

月日・曜	紙誌名	見出し	執筆者	写真	内容	特徴・特記等
6/22 木	讀賣 (夕) ９面	出陣学徒等の遺作公演／東京音楽学校生らの自筆譜もとに／来月上野で	池田和正	３点。①光景：出陣学徒壮行会、②人物：草川宏、③楽譜：草川《ピアノソナタ》	イベント趣旨、調査経緯、問合先、資料収集保存	４名の中で草川宏を重点的に紹介
7/14 金	産經 22面 ［文化］	戦没学生の「遺譜」蘇る調べ／東京芸大130周年企画／奏楽堂で30日演奏	江原和雄（モーストリー・クラシック編集長）	５点。①～④人物（戦没学生４人）、⑤光景：出陣学徒壮行会	趣旨、経緯、アーカイブ、シンポ、トーク、問合先	４名均等に戦没情報と演奏曲目紹介。大中・野見山
7/19 水	毎日 (夕) ９面	戦没学生 夢託した譜面／72年経て発見 父と同じ道志し／「夕焼小焼」作曲家 長男	福島祥	２点。①人物：草川宏、②楽譜：草川宏の手稿譜と封筒	草川宏の楽譜、弟・誠氏の語る父（草川信）と兄	草川宏の紹介にしぼり、他の３名にはふれず
7/24 月	朝日 (夕) ３面 ［文化］	戦没学生が紡いだ曲／時を超えよみがえる／東京芸大が４人の楽譜発掘、演奏へ	星野学	３点。すべて人物。①鬼頭恭一と村野弘二が写る集合写真、②草川宏、③葛原守	演奏会趣旨、４名紹介、シンポ、アーカイブ構築、問合先	４名均等に戦没情報と演奏曲目紹介
7/28 金	東京 22面 ［都心］	戦没学生の楽曲響け／30日、台東／オペラなど14曲演奏	樋口薫	なし	趣旨と案内、４名紹介とゲスト、問合先	比較的短い記事
7/28 金	日本經濟 40面 ［文化］	響け戦没学生の曲／戦時下の音楽学校の資料集め、譜面を復元／芸大奏楽堂で演奏会	橋本久美子	２点。①資料：草川宏の日記と楽譜、②人物：筆者	調査の経緯、譜面との出会い、調査現状と演奏会趣旨	記者が取材し第１稿執筆、筆者が直し社側と共同作業
7/29 土	中國 23面 ［福山］	葛原しげるの次男／守さん遺作曲／母校で演奏へ／あす東京芸大	高木友子	１点。人物：葛原守	遺作に「プロの演奏家が命を吹き込む」。安子氏、眞氏	福山市神辺町出身の葛原しげるとの繋がり強調
8/1 火	毎日 21面 ［東京］	東京音楽学校から学徒出陣／戦没学生の作品演奏／聴衆700人	福島祥	１点。舞台写真（大中・野見山をゲストに迎えて歌う《級歌》	当日の様子。草川宏の甥と美術の院生取材	全容紹介しながら草川宏に焦点
8/7 月	朝日 21面 ［東京］	【東京】戦没学生よみがえる旋律／東京芸大で作品演奏会／遺品から自筆譜 幻のオペラも 【むさしの】戦没学生の楽曲 時を超え今に／戦後72年、東京芸大でコンサート／楽譜や音源は公開予定	西村奈緒美	【東京】６点。①舞台：ゲストを迎えて草川《級歌》演奏、②譜面：草川自筆《昭南島入城祝歌》、③～⑥４名の顔写真 【むさしの】６点。①光景：壮行会、②《昭南島入城祝歌》③～⑥４名の顔写真	二つの紙面は同一記事だが見出し、写真、レイアウトに相異あり。調査経緯、４名の紹介、クラウドファンディングに言及、遺族取材	CFで300万円を募ったところ489万集まり「今後は楽譜や音源をアーカイブで公開していくという」
8/11 金	しんぶん赤旗 ９面	残された楽譜よみがえる／東京芸大「戦没学生のメッセージ」	小宮多美江	１点。トークゲストの前で《級歌》演奏	白狐の作曲者村野弘二と團伊玖磨に言及	村野と團。継続とアーカイブに期待
8/15 火	毎日 22面	嫌な流れ止めねば／あの時代と似た空気／満州に出征 96歳・野見山さん	福島祥	１点。人物：野見山暁治：福岡県糸島市のアトリエにて	野見山を取材。出征、学友の遺作収集、昨今の情勢への憂慮	「演奏会での同氏の話に惹かれ糸島まで取材」と記者
8/16 水	読売 西部 (福岡)	音楽学徒 生きた証し／埋もれた歌曲 時超え響く／忘れ得ぬ旋律 下戦後72年	後田ひろえ	２点。①人物：奏楽堂で佐藤正知・明子夫妻。②人物：鬼頭恭一	築城空での鬼頭に焦点。「雨」の作品と演奏、妹の証言	「兄が懸命に生きた証しを残してほしいので大学に託す」と妹
8/22 火（発売） 9.3号	サンデー毎日 31頁	「音」となって母校に帰ってきた戦没藝大生「無念の楽譜」の響き	山内喜美子	１点。舞台写真：村野弘二《重たげの夢》演奏	調査経緯を取材。４名の作品と戦没を紹介。情報提供の呼び掛け	記事は長くないが趣旨と演奏と調査を満遍なく記述
8/24 木	産経 12面	叔父の歌った“反戦歌”（家族がいてもいなくても 連載511回）	久田恵	なし	作品への感想。会場の様子。叔父のこと	連載エッセーの中で取り上げられた
9/28 木	新婦人しんぶん	戦没学生のメッセージ／インタビュー	担当：浅井まり	２点。①人物、②出陣学徒壮行会	企画意図等について橋本を取材	情報提供先を記載

ラジオ放送

月日・曜	局	番組名	ディレクター	概要	特徴・特記等
7/24 月	NHK 第一 放送	「先読み、夕方ニュース」の「夕方トピック：楽譜にこめられた戦没学生の思い」	安　里 恭幸	大石泰出演(約12分)。アナウンサーの概要紹介に続き、大石がアナウンサーの質問に答えて進む。村野《白狐》が中心。最後に当日の案内	生放送

テレビ放送

月日・曜	局	番組枠	ディレクター	概要	特徴・特記等
8/1 火	TBS	NEWS23「終戦72年よみがえるピアノソナタ」(23:00-[8/2]00:06中7分20秒)	大　野 慎二郎	草川宏に注目。弟を取材。曲もピアノソナタの演奏者に曲の分析と作曲者の想いを取材。楽譜作成とスキャニングを映しアーカイブに言及	注目はイベントの新規性
8/15 火	NHK 総合	関東甲信越：おはよう日本「戦後72年(2)“戦没学生”よみがえる音色と思い」(7:45-8:00中約5分)	板　橋 俊輔	草川宏に注目。弟・草川誠と草川作品の演奏者(松岡あさひ、澤原行正)の取材に注力。《浦島》を中心に。大石、橋本への取材は主にナレーションに使用	草川宏作品の練習や浄書に密着。草川には詳しい話の聞ける遺族がおり、日記等の材料が豊富
8/17 火	NHK 総合	関東甲信越：首都圏ネットワーク「戦後72年 語り継ぐ記憶“戦没学生”の楽譜 よみがえる旋律」(18:10-19:00中約7分)	板　橋 俊輔		
9/16 土	TBS	JNNドキュメンタリー・ザ・フォーカス「よみがえる旋律～戦地に散った若き作曲家たち～」(01:25-01:55の30分)	大　野 慎二郎	8/1の拡大版。草川と村野に焦点	一昨年も放送した村野については新たにルソン島での取材も加えている

6　おわりに　歌い継ぐ「戦没学生のメッセージ」と循環型アーカイブの構築に向けて

本稿において、東京音楽学校から昭和18年12月に「学徒出陣」した人数を初めて体系的に調査し、47名と暫定した。彼らが在籍した学年で見ると、16年度から18年度に予科に入学した79名と、17年度と18年度に師範科に入学した69名を加えた148名で、47名は32%に相当する。この時点で男子生徒が激減したことが数字で可視化された。戦時下の男子在学者数と入営者数についても具体的な人数を記した。予科、本科、師範科、研究科在学生まで含めた入営者数を、記録上、104名と暫定した。調査を行った結果、記録の欠落も明らかになった。「戦没学生のメッセージ」の4名中、入営の記録が確認されるのは鬼頭と村野のみで、戦没は昭和23年に村野の「戦死除籍」のみである。記録調査による解明の限界を思い知らされる結果ともなった。残された課題の一つに、女子学生に関することがある。本稿では学徒出陣、すなわち男子学生のみが対象となったが、明治20年の創立以来、男女共学校であった同校の学校

史としては、男子学生の召集が学校全体の諸活動や女子学生の役割に与えた影響を明らかにすることも必要であり、それらは今後の課題となる。

「戦没学生のメッセージ」の演奏会は、記録調査、作品収集、遺族の協力、大学創立130周年というタイミングや、世間の支援者に支えられて成立し、マスコミの取材と報道により世間と接点を持った事例である。戦没学生に関する情報収集を継続するには、「戦没学生のメッセージ」を歌い継ぐことによって、社会にも定着させていくことが求められよう。資料や音源のデータ化や公開においても、利用され易いことが必要となる。アーカイブは自然に構築されるものではない。受け皿と発信の間に新たな資料収集、資料研究、整理と公開の仕組みを作らねばならない。使い、演奏することで発信され、受けとめられ、戦没学生の掘り起こしや演奏の恒例化を大学が行っているという情報が伝播することによって、「まだ見ぬ人」との繋がりを引き寄せることであろう。音楽が、作曲と演奏と聴取によって成り立つように、アーカイブには、収集・保存・公開の三本柱が連携する循環型アーカイズ構築が必要である。長期的に受け皿となり、他分野での共有と利用が可能なアーカイブを構築することが求められよう。

参考文献

吉見俊哉「デジタル時代における知識循環型社会の価値創造基盤」『情報管理』vol.56 no.8（2013）、491-497頁

東京大学史史料室編『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会（1998）

学校法人専修大学編・新井勝紘監修『専修大学史資料集　第七巻―専修大学と学徒出陣』専修大学出版局（2015）

京都大学大学文書館編 平成一六・一七年度総長裁量経費プロジェクト『京都大学における「学徒出陣」調査研究報告書 第一巻』（2006）

同上文書館編『同　第二巻』同文書館編（2006）

『文系私立大学における学徒出陣の基礎的研究』（平成26年度～28年度　科学研究費補助金　基盤研究(c)　研究成果報告書　研究代表者：新井勝紘　平成29年［2017］3月

西山伸「徴集猶予停止に関するいくつかの問題について」『京都大学大学文書館研究紀要』第41号（2016）、41-54頁

西山伸「1939年の兵役法改正をめぐって―「学徒出陣」への第一の画期として―」『京都大学大学文書館研究紀要』第13号（2015）43-54頁

『別冊一億人の昭和史 学徒出陣 日本の戦史別巻⑨ 死と対決した青春の群像』毎日新聞社（1981）

野見山暁治・宗左近・安田武著『祈りの画集　戦没画学生の記録』日本放送協会（1977）

戦没画学生慰霊美術館「無言館」編『新版 戦没画学生人名録』（2009）

注

1　戦前の学制では、大学生は「学生」、専門学校生や高等学校生は「生徒」であり、『東京音楽学校一覧』および当時の公文書等においても「生徒」と記載される。本稿では、公文書記録等は「生徒」とし、「戦没学生」「学徒出陣」等の慣例語の脈絡における呼称としては「学生」を使用するため、両者が混在する。全体としては「学生」が多くなっている。

2　全国大学史資料協議会は第２回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」を７月３日から８月２日に明治大学博物館で行い、本学大学史史料室からは大正時代の学友会演奏会プログラム、「宣戦の詔勅」、戦後第1回芸術祭プログラムを出展した。従来、大学側の視点で記述された大学史を、学生側の視点で捉える試みでもあった。10月同協議会の全国研究会「『戦後70年』と大学史資料」では、「「戦後70年」と大学史資料―九州帝国大学の学徒出陣―」（九州大学文書館・折田悦郎）「「慶應義塾と戦争」を巡る資料と研究」（慶應義塾福澤研究センター・都倉武之）等の発表があり、活発な情報交換が行われた。

3　本稿は平成27～29年度科学研究費補助金 基盤研究(c)「戦時下の芸術専門教育―東京音楽学校の事例を中心に」(16Ｋ03039研究代表者：橋本久美子)の報告の一部であり、調査には大河内文恵、鳥谷部輝彦両氏の協力を得ている。調査および情報収集にご協力いただいた卒業生、戦没学生ご遺族、ご関係者に」御礼申し上げる。

4　本稿ではお名前を挙げるにあたり、一部を除き敬称略とする。

5　東京音楽学校の分教場は明治31年［1898］神田区一橋通に設置され、選科と小学唱歌講習科の教授が行われた。大正12年［1923］９月関東大震災により焼失し、11月東京盲学校校舎を借りて授業再開、昭和３年［1928］10月神田区駿河台に分教場校舎が落成。戦後、同地に附属高校が開校したが高校は平成７年［1995］に上野校地に移転した。

6　大学史史料室蔵

7　平成９年［1997］のインタビューによる。『藝大通信』第22号（2010)、26-27頁参照。

8　みやこ町歴史民俗博物館所蔵「小宮文庫」参照。現職教員等が小宮宛に提出した手紙類が保管されている。昭和21年頃と見られ、新校長が現状を把握し将来構想を練るため、意見を募ったと見られる。内容には有為の人材を推薦するもの、国威発揚した同僚を告発するもの、逆に擁護するもの、箇条書きの提案もある。小宮側の求めに応じたと推測されるが、“求め”の文言が確認されず、全体像の把握は困難である。

9　プロジェクト実行者代表は大石泰、酒井絵美演奏藝術センター教育研究助手と橋本が共同実行者であった。

10　当日の奏楽堂ホワイエでは関連資料の展示を行ったが、そこでも４名についての情報量や展示内容の公平を期し、展示ケース内のスペースも均等に配分した。

Towards an Archivisation of Wartime Records and Memories of the Tokyo Academy of Music: an investigation of the 'Student Departure to the Front' and the performance of works by students killed in action

HASHIMOTO Kumiko

In this essay, a study is undertaken that reports the progress and current status of both the research methods and preservation of the documents of the conscription (the so-called 'Student Departure to the Front') of the students of the Tokyo Academy of Music, which took place between December 1943 (when the war against the British and the US broke out) and August 1945 (when the war was lost). In relation to this, a concert 'Messages from the Students Killed in Action' took place for the 130th anniversary of the establishment of Tokyo University of the Arts. This involved, as a showcase, a performance of works by students killed in action, to increase awareness about the repeated process of the collection, preservation, and public release of documents – with all of these activities being interrelated.

In the case of Tokyo University of the Arts Faculty of Music's wartime predecessor (the Tokyo Academy of Music), like other higher-education institutes all over Japan, students who reached the lower age limit for conscription were called to duty – a so-called 'Student Departure to the Front' took place. The public records of that time and interviews with alumni of the Academy are collected in the *Tōkyo Geijutsu Daigaku Hyakunenshi Tōkyo Ongakugakkouhen Dainikkan*. However, these records are fragmentary, so the exact situation of the time cannot be comprehensively grasped. Until now, the following had not yet been investigated: 1. At that time, how many boys were matriculated in the Academy? 2. In December 1943, how many students were drafted all at once for the 'Student Departure to the Front'? 3. The basic facts and information from the wartime period until the end of the war, for example getting a grasp on exactly how many students were called to duty.

In 2015, the author accepted the requests from newspaper companies, television broadcasters, and bereaved families of the war dead to research the enrolment records and activities of two students who had died in the war. Taking this opportunity, the need to look into the drafting of students of the Tokyo Academy of Music became apparent to me while preparing a systematic investigation of this since last year.

This essay consists of:

1. Research report of the drafting of students of the Academy

1-1 Records relating to the students who are the subjects of the research

1-2 Documents used in the research

1-3 The calculation of the total numbers enlisted, and the numbers killed in action

1-4 An estimation of how many students attended the 'Provisional Graduation Ceremony' (15 November 1943) due to leaving for military service, and the names of these students

2. The wartime-era Tokyo Academy of Music as depicted in the concert

3. The number of male and female students enrolled in the wartime Tokyo Academy of Music preparatory course, teacher-training course, and the Hōgaku course

4. Questions of how can the information on the wartime era of the Tokyo Academy of Music be transmitted?

5. What and how did the newspapers and television programmes report on this?

In terms of research results, it was found that, during the war, 352 male students were matriculated in the Academy; it can be confirmed that 48 of these were conscripted in December 1943. The name, department, and course of study (piano or organ, for example) for each student have also been identified. The changes that occurred in each of the concerts after the start of the Pacific War in 1941 until after the 1943 conscription of the students are discussed. The number of male and female students has also been made clear. The number of male and female students who entered the teacher-training course (shihanka) until this time was around the same but it has become clear that, in 1944 and 1945, the number of male students was extremely low, in contrast to the high number of female students.

Also, a summary of how the concert 'Messages from the Students Killed in Action' was reported in the newspapers and television programmes has been completed, including considerations of each of the main characteristics and trends appearing in their coverage. In addition, the problems that occurred and ideas for the future in relation to the sharing of archival and university documents with mass communication media companies and journalists are also evaluated.

Lastly, to make further progress in the collection of documents of the students who died in the war, the need for further public concerts from now, and the public release of recordings and scores is highlighted. This could help to reach wide audiences, increasing the chance of finding new information and documents (such as scores or class notes) from people related to such students who died during the war. As the optimal method for achieving this, the creation of a series of continually interrelated activities is recommended for the collection, preservation, and public release (including holding concerts and the release of recordings, etc.) to encourage further collection, preservation, and the public release (or performance) of such documents.